



窪川中津川



県

道19号が走る一斗俵地区を北進しながら左側、つまり西側に目をやると、四万十川の対岸に集落が見える。11世帯、20人が暮らす小さな集落、窪川・中津川である。

元は米ノ川村の枝村であったが、戦国期の地検帳には壹斗俵（一斗俵）村の中に中津川村の名がある。主に米ノ川村や壹斗俵村の村人の耕作地としての機能を果たしていた地域であったと思われる。江戸時代・元禄期の記録には、新しく開拓整備された「新田」はなく、また、寛保年間の記録でも、1世帯・5人が暮らすだけで集落というところまでには至っていなかったようである。世帯数が少しずつ増えてきたのは、江戸後期から明治の初めにかけてである。中津川村の近隣にあった、栗ノ木村、桑ノ又村も同様に世帯数が少なく、明治9年にこの3村が合併して中津川村となった。そして、明治22年の大合併により松葉川村となる。さらに、昭和30年には窪川町、平成18年に四万十町となり、旧大正町にある中津川と区別するため「窪川中津川」という地区名となったのである。

地区の産土神は熊野神社である。（旧栗ノ木村は河内神社、旧桑ノ又村は六十余社）もともと熊野神社は、山の登り口にある地区の大師堂からしばらく登ったところにあったのだが、数十年前に、すぐ手前にある山の

に移された。地区民の高齢化で山の上まで登れなくなったので、神社を下まで降りてくるということで、町内のあちこちで聞くのだが、この地区の場合はそうではなく、移転の理由についての面白いエピソードがある。何でも、以前の場所にあった時、誰もいないはずの神社から夜な夜な太鼓の音が聞こえるということが頻発したのだという。皆これを気味が悪がって、現在の場所に移されることになったのだと、地区の方にうかがった。幸い、移転後は太鼓の音はしなくなったというのである。ところで、前述の大師堂に祀られている木造の小さな仏様が実に素朴で味わい深い。また、その大師堂の麓の道路に建っている灯籠がとても粋なのである。灯籠の窓の片方が満月で、もう片方が三日月になっている。暗闇に浮かぶ灯籠の灯はさぞ可愛らしいことであろう。



片方が満月、もう片方が三日月になっている

町のうごき	(12月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
	男	7,985	-5	男 4	12	11	8
	女	8,820	-16	女 1	16	10	11
	計	16,805	-21	計 5	28	21	19
	世帯数	8,422	-8	(12月中の届出)			
	窪川地域	11,895人		大正地域	2,352人	十和地域	2,558人

四万十川の 水質状況

	適正值(mg/l)	1月10日
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	0.498
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.7
化学的酸素要求量	≤ 10.0	2.037

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部